第4章

北インド農村社会の変容

――女性と婚姻を中心に――

はじめに

文化人類学の分野では，「伝統社会」という観点で社会を静態的に捉えようとする傾向が強いが，ダイナミックに動いていく側面も，現代社会をみるうえでは必要不可欠である。すでに，1950年代には，ルイスが農村の社会変化について論じ，70年代には，シンガーが，宗教の側面から近代化の問題をとりあげてきた(1)。近年，農村の社会変化に焦点をあてた研究には，エティエンヌやエプスタイン，ウルリッヒの研究などがある(2)。とくに，女性の地位の変化に焦点をあてたものについては，最近，ミンターンが，ラージプート女性の55年から75年にかけての変化を社会，経済，宗教，教育などの面から整理・分析している(3)。また，本章の調査対象地域であるウッタル・プラデーシュ州に関しては，ワイザー夫妻が20年代のウッタル・プラデーシュ州西部の村落の様子を描いた *Behind Mud Walls* というすぐれた民族誌をもとに，C・ワイザーが62～71年に再調査を行って，そのあいだの社会変化を *Four Families of Karimpur* にまとめている(4)。さらにそのあとを継ぐ形で，ワドリーが60年後半から70年半ばまでと83年から84年にかけて再調査し，その結果を，各章ごとにライフ・ヒストリーを語らせるという手法をとりながら，ライフ・サイクル，ジャジマーニー・システム，土地制度，農業などの観点から，ほぼ60年間にわたる変化についてまとめている(5)。

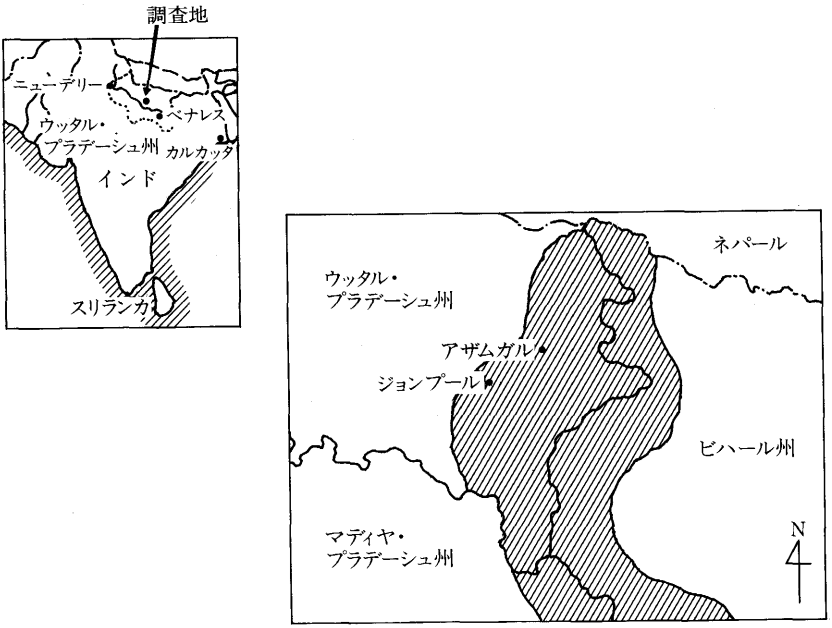
このように，社会変容については繰り返し論じられてきたが，この数年のインド社会の変化には顕著なものがある。都会では，衛星放送もみられるようになり，ベネトンやラコステなど欧米のブランド・ショップも立ちならぶようになってきた。都会だけでなく，農村にもその変化のきざしが現れ，女性の生活や意識にも大きく影響を与えつつある。筆者は，北インドの農村でこの10年間，婚姻儀礼を中心とした女性と儀礼に関わるフィールド・ワークを行ってきた[(6)]。本章では，筆者が参与観察によって調査を行った1984年からの10年間の動きと，聞き取り調査やセンサス・データ，文献資料などによって得られた過去30年間の動きという二つのスコープから，婚姻儀礼を含めた婚姻に関わる諸問題を中心に，変わりつつあるインドの農村社会を検討してみたい。そのさいに，社会・経済的変化が，女性が行う儀礼にどのように表れ，その行動や意識にどのような影響を与えているのかを中心に考察する。

第1節　調査地域をめぐる社会変化

1．調査地域の概要

調査地域は北インド，ウッタル・プラデーシュ州東部にあり，行政的には，アザムガル（Azamgarh）地区（県）に属する（図1）。アザムガル地区は，ウッタル・プラデーシュ州政府が分けた経済地域区分のうち，経済的後進地域として，第3次計画以来，特別の政策がとられてきた東部地域にある[(7)]。表1に1961年，71年，81年のセンサス・データの一部をまとめた。これにみられるように，アザムガル地区は，ウッタル・プラデーシュ州の平均に比べて耕作者率（自作率と小作率の合計）が低く，逆に農業労働者率は高い。つまり，土地所有者の割合がウッタル・プラデーシュ州平均に比べて低い。また識字率も，州全体の平均に比べて低い。このような後進地域においても，社会・経済的な変化にともなって，様々な面で大きな変化がみられることに注目し

図1　インドのボージプリ地域



（出所）　筆者作成。

たい。

現在からほぼ30年前にあたる1960年代とこの10年の変化を比較する理由は，まず第1に，60年代がウッタル・プラデーシュ州の農村において電気が導入され，収穫量の多い新しい種が蒔かれるようになるなどの新しい動きが登場してきた時代であることがあげられる[8]。第2に，60年代になるとヴィレッジ・サーベイ・モノグラフが整備されてきたので資料が手に入りやすいことがある[9]。第3に，現在，様々な儀礼の中心的な担い手である50代前後の女性たちが結婚した頃であり，ことに婚姻儀礼や儀礼の変化について，詳しい聞き取り調査ができるということがある。調査方法は，50代前後の女性60人と，20～30代の女性40人の計100人にライフ・ヒストリーや儀礼に関するインタビューを行うとともに，84年から継続して行ってきた参与観察の方

表1　ウッタル・プラデーシュ州とアザムガル地区のセンサス・データ

ウッタル・プラデーシュ州

	人口（人）	耕作者率（%）	農業労働者率（%）	識字率（%）
1961年	73,746,401	63.9	11.3	17.7
男性	38,634,201	63.6	9.1	24.3
女性	35,112,200	64.8	19.2	7.0
1971年	88,341,114	57.4	20.0	21.7
男性	47,016,421	59.1	17.2	31.5
女性	41,324,723	42.6	44.5	17.6
1981年	110,862,013	58.52	15.98	27.16
男性	58,819,276	59.53	14.16	38.76
女性	52,042,737	47.83	35.23	14.04

アザムガル地区

	人口（人）	耕作者率（%）	農業労働者率（%）	識字率（%）
1961年	2,408,052	64.3	16.7	16.3
男性	1,185,008	69.6	11.4	26.4
女性	1,223,044	53.0	28.1	6.4
1971年	2,857,434	54.4	28.0	19.1
男性	1,431,267	60.6	21.7	30.0
女性	1,426,217	23.5	59.0	8.2
1981年	3,544,130	61.13	17.51	25.10
男性	1,753,826	65.96	12.23	38.27
女性	1,790,304	35.81	45.02	12.20

（出所）R. Gupta, *Part XIII-B, Primary Census Abstract, District Azamgarh, District Census Handbook, Series-22, Uttar Pradesh, Census 1981,* Allahabad : Indian Administrative Service, 1981／D.M. Sinha, *Part X-B, Primary Census Abstract, District Azamgarh, District Census Handbook, Series-21, Uttar Pradesh, Census 1971,* Allahabad : Indian Administrative Service, 1976をもとに作成。

法を用いている。

調査地のS村の村民は，すべてヒンドゥー教徒であり，人口約400人ほどが居住している（表2，3，4）。S村は，ヤーダウ（yādau），カハール（kahār），チャマール（camār）という三つのカーストで構成されており，ヤーダウが人口の3分の2以上を占める。それぞれ牛乳の販売，水汲み，皮革処理を伝統的な職業としているが，現在はどのカーストもほとんどが農業を営んでおり，サトウキビや麦類を主産物とし，農産物を街の市場で売り現金収入に換

表2　S村のセンサス・データ

	人口（人）	世帯数	識字者（人）	耕作者（人）	農業労働者（人）
1961年	296	49	23	89	37
男性	150		23	87	13
女性	146		0	2	24
1971年	305	60	16	123	37
男性	164		15	85	17
女性	141		1	38	20
1981年	391	56	73	75	29
男性	205		62	73	18
女性	186		11	2	11

（出所）P.P. Bhatnagar, *49-Azamgarh District, District Census Handbook, Uttar Pradesh, Census 1961,* Allahabad: Superintendent of Census Operation, U.P., 1965／D.M.Sinha, *Part X-B, Primary Census Abstract, District Azamgarh, District Census Handbook, Series-21, Uttar Pradesh, Census 1971,* Allahabad: Indian Administrative Service, 1976をもとに作成。

表3　調査地の村の人口構成（1984年）

（単位：人）

年齢(歳)＼性別	男　性	女　性	合　計
0～9	43 (21)	23 (14)	66 (35)
10～19	28 (10)	13 (8)	41 (18)
20～29	19 (6)	22 (8)	41 (14)
30～39	20 (9)	12 (7)	32 (16)
40～49	11 (6)	18 (6)	29 (12)
50～59	18 (3)	10 (4)	28 (7)
60～69	5 (1)	2 (2)	7 (3)
70～79	0 (0)	2 (0)	2 (0)
80～89	1 (0)	1 (1)	2 (1)
90～100	1 (0)	0 (0)	1 (0)
計	146 (56)	103 (50)	249 (106)

（注）かっこ内の数字はチャマール・カーストの数を示す。出稼ぎ中の者は含まない。
（出所）筆者作成。

表4　調査地の村の人口構成（1994年）

（単位：人）

年齢(歳)＼性別	男　性	女　性	合　計
0～ 9	19 (2)	14 (13)	33 (15)
10～ 19	39 (22)	31 (14)	70 (36)
20～ 29	20 (9)	23 (11)	43 (20)
30～ 39	13 (4)	21 (5)	34 (9)
40～ 49	21 (8)	12 (8)	33 (16)
50～ 59	6 (6)	12 (5)	18 (11)
60～ 69	13 (4)	11 (4)	24 (8)
70～ 79	5 (1)	2 (0)	7 (1)
80～ 89	0 (0)	2 (1)	2 (1)
90～100	1 (0)	1 (0)	2 (0)
計	137 (56)	129 (61)	266 (117)

（注）　かっこ内の数字はチャヤール・カーストの数を示す。出稼ぎ中の者は含まない。
（出所）　筆者作成。

えている。

本章では，ヤーダウ・カーストを中心に記述する[10]。ヤーダウ・カーストは後進カーストであるが，ウッタル・プラデーシュ州においては，中間の上層カーストとして位置づけられている。1951年のウッタル・プラデーシュ州において，ザミンダール廃止法案が可決されたことにともない，ヤーダウをはじめとする中間カーストの上位層がある程度の土地を所有するようになり，自営農として台頭してきた[11]。アザムガル地区では，タークル（ラージプートの尊称）という地主階級がドミナント・カーストである。だが，それに対抗する形で，この30年間，とくにこの4～5年間は，ヤーダウ・カーストの社会的地位の上昇が顕著である。89年に，それまで連邦政府の政権を掌握してきた国民会議派に代わって，ジャナタ・ダルが参加した国民戦線が誕生した。この政権の誕生にヤーダウが関わっており，さらにその勢いを受けて，ウッタル・プラデーシュ州と隣のビハール州でもヤーダウの州首相が誕生した。94年現在は，ウッタル・プラデーシュ州では，ムラヤム・シン・ヤーダウというヤーダウ・カーストの州首相が政権を担っている。調査地のヤ

ーダウの家庭には，ムラヤム・シンの写真が飾られているところもある。社会・経済的地位の上昇が顕著にみられるヤーダウ・カーストを取り上げることは，ダイナミックに変化するインド社会を分析する一つの視点を提供するものと思われる。

2．S村の社会変化

最初に，調査地をめぐる社会変化をみておきたい。まず，1960年頃には，家屋はほとんどが日乾煉瓦家屋(kachā makān)であり，電気は灌漑用のポンプに使用するためにのみ引かれていた。レンガ工場は近くの村に60年代半ばにできていたが，家屋に焼成レンガを使用しはじめたのは70年代になってからである。人口5000人ほどのA街では，60年頃には家庭用に電気が導入されていた。だが，村の一般の家庭に電気が入りはじめたのは70年代の初頭であり，84年の段階でも，まだ灌漑ポンプ用の配線から一部の家に電線が引かれただけで，光源にはランプが主に使われていた。94年現在では，ほとんどの家がきちんと電気代を払って電線を引いており，数年前からは停電することも減った。電気の導入は，暗いなかで家事をしていた女性たちにとっては，とくに歓迎されている。また，84年の時点では，ヤーダウの家はすべて焼成レンガ積み家屋（pakkā makān）にかわった。また，94年現在は家屋の増築や部屋の建増しが盛んに行われている。ちなみに61年のセンサス・モノグラフでは，同じアザムガル地区の事例で，焼成レンガ積み家屋は1軒だけであり，半焼成レンガ積み家屋が13%，あとは日乾煉瓦家屋という程度で，ほぼ調査地の村と似たような状況であった[12]。70年頃から手押しポンプが使われはじめたが，その10年前には一部の家にしか手押しポンプはなく，3～4世帯が共同で井戸を利用していた。この数年でポンプがほぼ各世帯に設置され，井戸はほとんど使用されなくなった。そのため，主に女性の仕事である水汲み作業が軽減された。下水道やトイレの設備などはないものの，この1～2年で，コンクリートで排水口の整備もなされてきた。とくに調査地の村では，

ジャナタ・ダルが州の政権を握っていた時代に，ポンプの設置や道路の改善が目にみえて進んだ。調査地域では，政府から１村当たり２万5000ルピーほど補助がでたという。

北インド社会では，男性の家長とその弟たち，およびその家族がともに住む拡大家族が一般的である。調査地域においても，その傾向がみられたが，1984年からの10年間で１世帯当たりの家族の人数は，平均6.9人から8.7人に増えている。出稼ぎのため，村に日常的に居住していない人数も含めると，7.7人から9.3人に増加している。また，この数年で分家した家族がみられ，世帯数も増えており，33世帯から39世帯へと増加している。これは，子供の成長による世代交代が進んだためだけでなく，経済的に豊かになり，別に家を建てて分家する余裕ができたことにもよる。

土地所有に関しては，1984年には畑は１世帯当たり平均5.3ビガ（約2500㎡）であったが，94年には5.1ビガに減っている。しかし，世帯数は増加しているので，村落全体としては増えている。また，他村に畑を購入し小作人を雇って耕作を依頼している事例や，畑以外に商売を始める準備として土地を購入している事例もある。家畜の平均所有数は，84年が雄牛1.3頭，雌牛0.26頭，バッファロー0.85頭，ヤギ1.7頭，他に物資運搬用にラクダ，馬をそれぞれ飼っている家がある。94年では雄牛1.85頭，雌牛0.25頭，バッファロー1.54頭，ヤギ1.28頭で，ラクダ，馬を飼っている家がそれぞれ１軒ずつある。耕作用の雄牛と耕作兼搾乳用のバッファローの購入が目立つ。

調査地の村から，人口5000人程度のＡ街に出る道路は，1960年初頭には細い道路が１本通っていただけだが，94年現在は道幅が広くなり，舗装がほとんどなされ，道路沿いには店が建ち並ぶ状態となってきた。それとともに，土地の値上がりも顕著にみられる。数年後に市場の設置が検討されている場所では，１ビガ当たり６万から10万ルピー程度まですでに値段が高騰している。90年に村はずれにバスの停留所ができ，徒歩や自転車だけでなくバスで市場へ出かけられるようになった。また表５にあるように10年前に比べて出稼ぎが増えており，各家から平均１人は北インドの大都市へでかけている。

表5　S村からの出稼ぎ者数

(単位：人)

年齢(歳) ＼ 年	1984	1994
0～ 9	0	0
10～ 19	2	4
20～ 29	13	14(1)
30～ 39	4	14
40～ 49	1	7(2)
50～ 59	0	1
60～ 69	0	0
70～ 79	0	0
80～ 89	0	0
90～100	0	0
計	20	40(3)

(注)　1994年のかっこ内は，夫とともに出稼ぎ先に行く妻の数を示す。

おもな出稼ぎ先

1984年		1994年	
カーンプール	6	カーンプール	11
パーニーパット	3	ロディアナ	7
ロディアナ	3	パーニーパット	5
デリー	2	デリー	4

(出所)　筆者作成。

貧しさのためというより，豊かな生活を求めて現金収入を得るためという理由が多く，出稼ぎの収入によってテレビを購入した家族もある。94年の時点で村内にテレビは6台あり，ダウリー（持参金）によるものが3台，出稼ぎによるものが3台である。毎月，視聴料を30ルピー払っているが，電気がつかないこともしばしばある。というのは，最近，電力の需要に供給が追いつかない状態となっていることや，電線が闇で売れるために盗まれることが起こるからである。

衣服，食事，農業生産などの変化については，ここでは触れる余裕がないので，別稿にゆずるが，最近，非常にめだってきた現象として，オウムや羊など生産に関わらない鳥や動物，つまりペットを飼う家がでてきたり，家の改築や壁の塗りなおしに加えて，家の壁に花を飾る現象もみられ，生活に余

裕とはいえないまでも，農村でも生活レベルの底上げがなされていることは確かなようである。

第2節　婚姻システムに関わる変化

1．婚姻の条件や形態の変化

次に，婚姻の制度的側面の変化をみておきたい。北インド社会では，配偶者は，同じジャーティ（jāti，カーストのサブ・グループである出自集団）で，自分とは異なるゴートラ（gotra，父方の祖先を共通にもつ集団）に属する者でなければならない。また，娘を上位のグループに属する男性と結婚させ，姻戚関係を築くことによって自分の家の地位を高めるハイパーガミー（上昇婚）の傾向が一般的にみられ，結婚相手の選択の幅が限られている。適当な相手をみつけても，実際の結婚にいたるまでにはいくつかの条件を満たす必要がある。娘が12～13歳になると，娘の両親は親戚に頼んだり，ナーイーという散髪屋カーストを介して，結婚相手の2～3歳年上の花婿を探しはじめる。最近では，親戚や知人のネットワークの方が，ナーイーの情報よりも活用されている。結婚相手の探し方も，10年前は会ってから相手の情報を得ていたが，現在では先に相手の情報を得て，本人や家族の状況を確認したうえで会いに行く[13]。

現在の調査地域の婚姻儀礼は，3段階に分かれている。女の子が14～15歳，男の子が16～17歳になると，第1段階の婚姻儀礼が行われる。第1段階の儀礼はシャーディー（śādī）と呼ばれ，9日間にわたり，最も盛大に儀礼が行われる。このときに婚姻が実質的に成立するが，花嫁は実家にとどまる。数年後に第2段階の婚姻儀礼であるゴウナー（gaunā）の儀礼が行われる。このときには，花婿の家で3日過ごすだけで実家にもどってくる。さらに半年から1年して，第3段階のドーゲー（doge）あるいはドンガー（donga）儀礼

がなされ，最終的に結婚生活が始まる。

したがって，実際に結婚生活が始まるまでに3年ほどが経過しており，花嫁の年齢は17～18歳に達している。1960年代には花嫁が5～6歳に達する頃までに，シャーディー儀礼が行われ，またドーゲー儀礼までの期間も短かく，幼児婚の形態が多くみられた。この背景には，ヒンドゥー教では父親は娘を初潮前に結婚させるという宗教的義務や，持参金は年齢が低いほど安いという経済的問題が関わっている。表6にみられるように，94年現在で，30代以上の女性の多くは小学校も卒業していない。彼女たちの識字率は5％以下である。ところが10年前には，女性も小学校を卒業することが普通になり，結婚年齢も12～13歳以上に上昇してきた。これが現在の花嫁になると，ほとんどが中学校を卒業し，高校を卒業したものの割合も年々増えている。進学率の上昇とともに，婚姻の年齢もあがる傾向にある。

また最近では学歴も重要な婚姻の条件となりつつある。花婿と花嫁の双方とも，条件の良い相手をみつけ，ダウリーの金額の交渉を自分の側に有利に展開するために，花婿は高校卒業，花嫁は中学卒業が主流になりつつある。調査地域の公立学校の授業料は無料に等しい金額で，それも村から歩いて20分ほどの距離にあるにもかかわらず，村では現在，バスで遠くの私立学校へ通う小学生が3人いる。さらに，学校教育の普及にともない，街の学校に通うために，今では結婚前に相手に出会う場合もでてきた。以前はシャーディー儀礼のさいに初めて顔を合わせることが普通であり，また儀礼の最中も花嫁は布ですっぽり顔を覆っているので，第2段階のゴウナー儀礼まで相手の顔がわからなかった。現在では，進学率があがり，ゴウナー儀礼が行われるまでの期間が長くなったために，学校や市場で花婿と出会うこともしばしば起こり，それにともなう婚約解消などのトラブルも生じている。

さて婚姻にあたって，もう一つの問題は花嫁，花婿の相性である。司祭が占星術によって占うが，これも最近では，相性が多少悪くても，婚姻儀礼の日取りを吉なる日に設定することによって回避しようという傾向がみられる。したがって，儀礼のシーズンがある程度決まっているうえに，同じ日に

表6　S村村民の教育歴（1994年）

（単位：人）

	男性		女性	
	教育歴	人数	教育歴	人数
10代	小学在学	6	小学在学	1
	中学在学	7	小学卒	4
	中学卒	20	小学中退	1
	中学中退	1	中学在学	7
	高校在学	1	中学卒	8
	高校卒	4	中学中退	2
	B.A.*中退	1	高校在学	1
			高校卒	2
20代	小学卒	4	小学卒	11
	小学中退	1	中学卒	5
	中学卒	11	高校卒	1
	高校卒	10		
	高校中退	2		
	I.M.*卒	1		
	B.A.*在学	1		
	B.A.*卒	1		
	B.A.*中退	1		
30代	小学卒	3	中学卒	3
	中学卒	8		
	中学中退	1		
	高卒	1		
	B.A.*在学	1		
	B.A.*卒	2		
40代	中学中退	1		
	M.A.*卒	1		
50代	中学卒	1		

（注）*インドの教育課程制度は，州によって細かな違いがある。当該地域では，基本的に小学校1～5年，中学校6～8年，高校9～10年，インターメディエイト(I.M.)11～12年，大学(B.A.)13～15年で構成されている。
（出所）筆者作成。

集中して行われることになる。

また，モータリゼーションの発達とともに婚姻圏の拡大がみられる。1960年代には，5～10キロメートル程度しか離れておらず，バラティと呼ばれる花婿行列も自転車で行ける距離であった。花婿自身はドーリーという篭で式

場に運ばれていた[14]。90年代に入ってからは，バスで1時間以上，50キロメートル以上離れた地域との結婚が普通となっている。現在では，花婿とその男性親族，親しい友人は，ジープやバスで行き，村の男性たちは，トラクターの荷台に揺られて行く。シャーディー儀礼は，農閑期で最も暑いヴァイサーク月（4～5月頃）に集中し，同じ日に何組もの婚姻儀礼が行われるので花婿行列で道路が混み合い，車のラジエーターを冷やすため，しばしば休憩するので，4～5時間かかるような状況がみられる。儀礼の始まる時間がそのため遅くなり，真夜中をすぎても終わらない。

2．ダウリーの額の上昇

ネオター（neotā）は，結婚が決まると，親戚から花嫁・花婿の家へ贈られる品物のことである。婚姻を知らせる方法は，伝統的には，ターメリック（haldī）をナーイーが相手方にもっていくという形態をとる。ターメリックを受け取ると，結婚式の1週間前から前日にかけて，その家族から花嫁あるいは花婿の家族へ，小麦粉，米などの穀物類や黒砂糖が届けられる。ネオターの授受は，30年前は親族間のみで行われていた。現在は知り合いや友人間でも行われ，ネオターの範囲が拡大するとともに，その内容も穀物から50～100ルピーの現金のやりとりに変わってきている[15]。

婚姻にさいして，現在，最も重要な問題となっているのがダウリー（dowry）あるいはダヘーズ（dahej）と呼ばれる婚資の問題である。ダウリーは，花嫁側から花婿側に贈られ，持参金だけでなく，花婿側への贈り物や婚姻儀礼にかかわる費用も含まれている。1960年代初頭には，持参金は100ルピー前後でそれほど高額ではなかった。80年代に入って次第に上昇し，94年の時点では，現金が最低でも3000ルピー，多い場合には1万ルピーを超える場合も出てきている。例えば，ヤーダウのある家族の事例では，75年に結婚した長男の場合は，現金500ルピーであったのに対し，90年に結婚した三男の場合は5000ルピーと，15年間で10倍になっていた。また，花婿とその男性親族のた

めにシャツやズボンの生地，女性親族のためにサリーや装飾品，他にも食器，寝具，米，小麦粉，豆類などの穀物類，バッファローなどが贈られる。30年前には，花婿とその両親にだけ衣類や装飾品が贈られる場合が多かったが，現在では義理の姉妹や兄弟へも贈られるため，さらに費用がかかるようになった。また30年前には食器は銅製やスチール製が多く，数も少なかったが，10年前からはステンレス製のものが好まれるようになり，現在はプラスチック製の食器も贈られるようになった。自転車，腕時計，さらにはラジオ，扇風機，アイロンといった電化製品が増えてきて，現在では，テレビやバイクの時代に入った。

第3節　婚姻儀礼そのものに関わる変化

1．パオン・プージュナーからビヤーフへ

本章では，婚姻儀礼の細かい部分の変化をたどるよりも，現在の時点でみることのできる大枠の変化について取り上げていきたい。30年前と現在とを比べて，婚姻儀礼においてどこが違うのかを50代の女性たちに尋ねたところ，彼女たちが結婚した頃は，現在，主流となっているビヤーフ（byāh）とならんでパオン・プージュナー（paon pujnā）の婚姻儀礼の形態がかなり多くみられたということであった。ビヤーフは，花婿側が花嫁側の村に行って結婚するのに対し，パオン・プージュナーはその反対である。パオン・プージュナーの形態がみられた30年前には，花嫁側と花婿側の社会的地位の差はほとんどなく，花嫁側のダウリーはほとんど要求されなかった。現在の婚姻の形態，つまり花嫁側で婚姻儀礼を行う形態では，花婿側の地位が花嫁側の地位より高い上昇婚が望まれ，またダウリーをはじめ，花嫁側が多くの結婚費用を準備しなければならない。先に述べた50代の女性が結婚したときには，ダウリーが非常に少額であったことと考えあわせると，高額のダウリーが要求

される上昇婚の現象が広まったのは，この30年あまりのことになる。現在では，パオン・プージュナーの形態は，花嫁側が貧しくて花嫁の家で結婚式が行えない場合にとられる婚姻形態であると見なされており，この10年で調査したなかでは，一つのケースだけがパオン・プージュナー型の儀礼であった。

また，形態に関わるもう一つの変化として，現在，調査地でみられるシャーディー，ゴウナー，ドーゲーの3段階の婚姻儀礼は，かつて50代の女性が結婚した頃にはゴウナーとドーゲーが分かれておらず，ほぼ同時期に行われ，ゴウナーの段階で夫婦そろっての結婚生活が始まっていたことがあげられる。また，この第2段階のゴウナーで初夜を迎えることが期待されていた。現在では，花嫁，花婿ともまだ就学している場合が多いため，花嫁の姿を，儀礼的に花婿の家族にみせることに力点がおかれ，実質的な夫婦生活を始めるのはドーゲー以降である。

2．シャーディー儀礼の変化

婚姻儀礼は多岐にわたるので，詳細は別稿[16]をみていただき，本章では最も重要な第1段階のシャーディー儀礼を簡単に説明し，その変化をみていきたい（表7）。まず，1日目から6日目までは，花嫁・花婿双方の家で様々な儀礼が行われる。その内容は，1日目に行われるウルド・チャーワル・チャーンナー（urd cāval chānnā）や4日目のウルド・カー・ドイーヤー・ドーナー（urd kā doīyā dhonā）のように，花嫁・花婿を祝福し，悪霊を払う儀礼や，チューリー・ネオター（chūlī neotā）やクートナー（kūṭnā）儀礼のように祖先を儀礼に招待したり，神に結婚の成功を祈る儀礼が中心である。6日目は，とくにマットマンガラ（maṭmaṅgala）と呼ばれる7日目，8日目の儀礼に向けた一連の儀礼が行われる。ここまでは，既婚女性が行う儀礼が中心である。7日目に花婿とその男性親族，村の男性が花嫁の家を訪ずれ，花嫁・花婿がそろってビヤーフ（byāh）と呼ばれる主要な儀礼が行われる。とくに重要なものは，夜中に行われる花嫁・花婿を祝福するパオン・プージャー（paon

表7　シャーディー儀礼のプロセス

花嫁の家		花婿の家	
1日目	1 ウルド・チャーワル・チャーンナー	1日目	1 ウルド・チャーワル・チャーンナー
4日目	2 ウルド・カー・ドイーヤー・ドーナー	4日目	2 ウルド・カー・ドイーヤー・ドーナー
6日目	マットマンガラ 3 カルヤーン・プージャー 4 ハリス・ガーダナー 5 カラシュ・ゴトナー 6 クートナー 7 チューリー・ネオタ 8 チュンマー 9 ドォンディー・バーンダナー 10 イムリー・ゴタナー 11 シル・ポナー	6日目	マットマンガラ 3 カルヤーン・プージャー 4 ハリス・ガーダナー 5 カラシュ・ゴトナー 6 クートナー 7 チューリー・ネオタ 8 チュンマー 9 ドォンディー・バーンダナー 10 イムリー・ゴタナー 11 シル・ポナー 12 パーンチ・バウエル 13 イナール・ビヤーフ 14 パリチャン 15 パオン・プージャー 16 ナークーン・ランガイーハ
		←	花婿行列出発
7日目	17 アグワーニ 18 タージ・パヒラーナー 19 イナール・ビヤーフ 20 パリチャン 21 ナークーン・ランガイーハ ビヤーフ 22 チュンリー 23 カニヤー・ダーン 24 パオン・プージャー 25 ラーワー・パリチャン 26 シンドゥール・ダーン 27 コフバール・カーナー	7日目	
8日目	28 キチリー・カーナー 29 アチャラ・ダラーナー 30 マンダップ・ウタルナー	8日目	31 ナクトゥリヤ
		→	花婿行列帰着
9日目	32 マウル・セールワナ	9日目	32 マウル・セールワナ

（出所）　筆者作成。

pūjā）儀礼と，花嫁と花婿の結婚が実質的に成立するシンドゥール・ダーン（sindūr dān）儀礼である。8日目には，花婿にキチリーという特別な食べ物を食べさせるキチリー・カーナー（khiçrī khānā）儀礼がある。司祭がこの花嫁と花婿がそろって行う7日目と8日目の儀礼の担い手となる。だが，女性

たちも儀礼の最中，ずっと歌をうたいつづける。9日目は，花嫁・花婿双方の家で，村の神に結婚を報告するマウル・セールワナ（maur servana）儀礼が行われて終了する。これは，既婚女性が行う儀礼で，歌と踊りがともなう。

シャーディー儀礼の構造そのものには大きな変化はみられないが，それでも様々な局面で変化がみうけられる。

まず第1に，司祭の行う儀礼のなかで，儀礼の秘儀的な部分が薄れ，厳粛さよりも祝祭的要素がより強くみられることである。例えば，シンドゥール・ダーンは花嫁の髪の分け目にシンドゥールという赤い粉を塗り，この儀礼によって結婚が成立する最も重要な儀礼だが，布で隠して秘儀的に行われるものであった。10年ほど前から結婚式の様子をカメラで撮影するようになり，さらに，この数年のあいだにビデオ・カメラも用いられるようになり，この儀礼の様子を顔をかくした布をとって撮影する場面もみられるようになった。

また，祝祭的要素の強化は，マンダップと呼ばれる結婚式場を装飾品で派手に飾りたてるようになったことにも現れている。1960年代は，マンダップは花婿の家では作られなかったが，現在では両方の家で作られる。ことに，7日目，8日目に花嫁・花婿がそろって儀礼が行われる花嫁側のマンダップは大きく，外側をサリーで覆い，電球を飾って華やかに飾りたてられており，明るい光源のもとで儀礼が行われる。さらに，花婿はドーティー（dhotī）という民族衣装を着て，ビヤーフに臨むのがこれまでのやり方であったが，現在では，花婿行列に出かけるときには，シャツとズボンを着て，靴下と靴をはいて出かけ，儀礼直前に着替える。またこの数年では正式にドーティーに着替えずに肩にかけるだけという場合もみられる。花嫁や花婿が着る衣装も派手な模様のものが好まれ，儀礼のさいにかぶる王冠も大きくきらびやかなものに変わっている。

また，花婿行列の一行のために用意された催し物も，少しずつ様変わりしている。女装した男性たちによる歌と踊りは変わっていないが，夜中に行われる映画上映会は，S村では1987年にビデオ上映会にとってかわった。現在

では，ビデオ・デッキとテレビを運び込んで，一晩中ボリュームをあげて見物する姿がみられる。

第2に，長くなったり，逆に省略されたりする儀礼がみられることである。例えば，この10年，パオン・プージャー儀礼を行う人が増え，最後の儀礼が終わる時間が遅くなった。この儀礼では親族が断食して，花嫁・花婿に食器を贈って祝福するものだが，以前は，食器を贈るのに費用がかかるので，かなり親しい親族だけが行っていた。現在では，親族だけでなく，知人も行うので儀礼自体が長くなる。これには，経済的に裕福になったことや，友人・知人の結びつきの強化がみられる。7日目の儀礼が長びくようになった分，8日目が短縮される傾向にある。昼食時に行われるキチリー・カーナー以降の儀礼が省略され，花婿の一行は自分の家に戻る例がしばしばみられるようになった。この理由として，実質的な結婚の儀礼は前日に終わっており，ショー的な要素の強い，様式的ともいえる儀礼は必要と判断されなくなったことや，婚姻圏の拡大とともに移動距離が長くなり，付き合いの範囲が増えて婚姻儀礼を掛け持ちする人がでてきたこと，人々が忙しくなったことが考えられる。

第3に，「浄・不浄」や「吉・凶」といった儀礼と関わる宗教的な観念が少しずつ揺らぎはじめていることがあげられる。例えば，先ほど述べたように，占星術に基づく花嫁・花婿の相性が多少悪くても，婚姻儀礼の日を吉なる日に設定することによって，災いを回避しようとする傾向がみられ，婚姻儀礼が特定の日に集中する現象がみられる。さらに興味深いのは，ブラーマンの地位の低下とともに，カースト体系の最下層に位置づけられてきたアウト・カーストであるチャマールが，ブラーミンの司祭を呼んで，婚姻儀礼を行うようになってきたケースがみられることである。ヤーダウ・カーストの儀礼においても，ブラーミンにとって下位のカーストにあたり，共食の範囲ではないヤーダウが調理した食事をブラーミンが食することもみられるようになってきた[17]。10年前までは，およそ考えられなかった現象であり，社会・経済的な地位の変化が，浄・不浄のヒエラルキーという宗教的な観念をうち

くずしていく時代を象徴的に物語っているように思える。

第4節　社会変容と女性

1．女性と婚姻儀礼

調査地域の婚姻儀礼は，司祭が行う儀礼（śāstrā ācār）と女性が行う儀礼（śtrī ācār）の二つの局面から成り立っている。司祭の儀礼の特徴は，ヒンドゥー教の主神に対してサンスクリット語でマントラ（真言）をとなえ，神に対する礼拝（pūjā, プージャー）を執り行うものであり，テキストに基づいた儀礼の形態といえる。一方，女性の儀礼の特徴は，風の神，水の神，火の神など家庭や村落レベルの神に対して儀礼を行い，口承伝統に基づいた歌やパフォーマンスがともなうことである。儀礼をリードするのは，ナウンという洗濯屋カーストの女性やリネージの年長の女性である。

ここでは，女性の行う儀礼の変化について検討したい。まず一つめに，女性の儀礼の主要な担い手となるのは親族の既婚女性たちだが，実家に戻ってきて婚姻儀礼に参加する女性が増えたことがあげられる。これには，交通網や道路が整備されて移動が容易になったことのほかに，女性の外出が以前よりは認められてきたという意識の変化が考えられる。その反面，二つめに女性たちの婚姻儀礼への参加の仕方が，リネージ内に限定されるようになってきたことがあげられる。親族の女性が儀礼の主要な担い手となるのは当然であるが，これまでは異なるリネージの女性であっても，村内の婚姻儀礼であれば，どの家庭にも歌を歌いに出かけていた。だがこの数年は，明らかにリネージ単位での儀礼への参加がみられ，村をあげての祭ともいえた婚姻儀礼も様変わりしつつある[18]。この理由として，村長選での対立やリネージごとの経済格差が目立ってきたことなどから，村内では付き合いの範囲がリネージ内に制限されるようになり，それが女性の行う儀礼においてリネージ単位

の参加という形で反映されているためと思われる。また，女性の行動範囲が広がり，同じ村の者より他の地域の友人・知人としての交際が活発となり，付き合いが村内に限定されなくなったことなどもその背景として考えられる。

三つめに，女性が儀礼のなかで歌う歌自体の内容や歌い方が異なってきていることがあげられる。女性たちは儀礼にともなってそれぞれ特定の歌を歌うが，すでに儀礼の内容と歌詞が異なり，儀礼との関連がわからなくなっている歌もある。これには，メディアの影響もうかがえる。ラジオやテレビなどで人気の高い歌詞は安いザラ紙に印刷されて，あっという間に村々に広がる。歌い方自体も，現在の若い女性の方がテンポが遅くなっているという。また，ガーリー（gālī）と呼ばれる花婿やその親族をあざける歌が7日目，8日目の儀礼のなかで歌われるが，現在，50代の女性が娘時代の頃に比べて，あざけりの程度が弱まっているという。以前は花婿とその親族を辱めるもっと汚い言葉を使っていた。だが，教育を受けた現在の若い女性の間には汚い言葉を使うのは恥ずかしいという意識が生まれている。花婿をからかう儀礼的パフォーマンスも，以前は手がこみいっており，長時間行われていた。今は，人々が忙しいせいかあっさりとすんでしまう。さらに，スーツとかズボンとか，西洋的な服装が歌詞のなかに入ってきたり，テレビやモーター・サイクル（オートバイ）など，ダウリーで人気の品物も歌詞に登場してきている。逆に，若い女性のなかには，現在ではほとんど使われなくなったり，まったく使用しなくなった衣服や女性の装飾品などが歌詞にでてくるので，意味がわからずに歌っている場合もある。

このように女性の行う儀礼は，リネージ中心に行われたり，歌の内容の変化などたしかに細かい点で違いがみられるものの，司祭の行う儀礼に比べて変化の度合いが少ないともいえる。ナクトゥリヤと呼ばれる性的な歌と踊りをともなう女性だけの儀礼は，男性は現在でもみることができないし，夜に秘儀的に行われる儀礼も変わっていない。これには女性の儀礼が，豊饒性と関わる性的な意味あいをもつものが多いことも理由の一因ではないかと思わ

れる。

そして，もう一つ面白い現象は，女性たちが儀礼を自分たちの意思表示の手段として用いる事例がみられることである。第1段階のシャーディー儀礼のさいには，花嫁側からの持参金だけでなく，花婿側からも花嫁やその女性親族に対する装飾品や衣類などの贈り物が贈られる。この花婿からの贈り物がきちんと花嫁側に渡されない場合には，花嫁側の村の女性たちが，第2段階の婚姻儀礼のさいに，花婿側へ花嫁を渡さないように儀礼を引き延ばすということがしばしばみられるようになった。約束を果たさない家族に嫁ぐと花嫁が苦労するという理由であるが，双方の男性たちが何とかなだめて儀礼を進めることになる。花嫁側のダウリーの金額が高騰していることもあろうが，女性たちが，パフォーマンスとしてではなく，意識的に儀礼を引き延ばすことによって男性主導の結婚に対する明確な異義申し立てをしており，今までの受け身の姿勢から積極的な姿勢に変化しつつある様子がみられる。

2．女性の意識の変化

さて最後に，社会の変容にともなう結婚や家族形成に対する女性の意識の変化について見てみたい。ここでは，主にこの10年間の変化をみていきたい。

第1に，上に述べた婚姻儀礼の事例にも表れているように，女性たちが結婚や家族形成について積極的に自分の意見を表明したり，自分の意志で行動するようになったことがあげられる。20代の女性のなかには，離婚を女性側から申し出るケースや，女性側から相手を選んで再婚するケースがみられるなど，女性が結婚に対する意思表示を行う事例がみられる。ついで，女性と男性の世界が明確に分かれているヒンドゥー社会では，夫と妻が人前で一緒に行動することは，これまでほとんどみうけられなかった。だが，20代の比較的若い夫婦たちは2人で部屋で話をしたり，夫婦一緒に写真をとってその写真を飾るといった夫婦単位の行動がみられ，夫と同じ立場とはいかないまでも夫婦関係が変化しているのは確かである。家族内の嫁・姑の関係につい

ても，絶対的な力をもっていた姑の立場が揺らいでいる。嫁が自分の意見を以前に比べて主張するようになり，嫁と姑の喧嘩もずいぶん増えた。それにともない，嫁が実家へ帰る機会が増え，実家での滞在期間が数週間単位から数カ月単位へと長くなる傾向にある。

さらに，今の20代から30代の女性は，家族形成について明確な意識をもっている。50代以上の女性は子供は神の子であると考えており，避妊や中絶には反対である。子供の数を比較すると，50代以上の女性はほぼ１人の子供を亡くしているが，平均6.3人の子供をもつのに対し，30代の女性では現時点において子供の死亡数は0.5人で，平均の子供数は4.1人である。死亡率が下がったこともあるが，教育や生活に金がかかるため，子供の数は４人ぐらいで十分だと考えられており，ある程度子供を産んでしまったあとで，女性自身が望んで避妊手術を受ける例が増えている。また若い母親たちは，息子だけでなく娘にもしっかり教育を受けさせたいと考えており，それも進学率をあげる一因となっている。

第２に，女性の行動範囲が，家から外へ，村内から街へ，農村から都会へと拡大の動きがみられる。以前は，祭などの特別な場合を除いて，女性だけで出かけることは稀だった。チャマールのような下位カーストの場合は，経済的に貧窮しているため，女性も外へ働きに行く必要があった。だが，中間以上のカーストにとっては，女性が市場や街まで１人で出かけることは，はしたない行動であると見なされていた。現在でも，女性が市場や街に出かけることに対しては，一応，口では非難される。だが，実際には，道路の整備やバスの開通により，１人で出かける年配の女性たちもしばしばみかけられ，若い女性たちも連れだって買い物に出かけることも増えている。

また，職業訓練を受けて街で働く女性もまだ少数ではあるがおり，女性が外に働きに出ることがタブー視されてきた時代とは変わってきている。農村から都会へ向かう女性もいる。出稼ぎは夫だけが出かけ，妻と子供は村に残るというのが普通にみられた形であるが，最近では，表５のように，夫の出稼ぎ先に一緒に出かける妻も増えている。また姑と喧嘩したときに，実家に

帰るのでなく，自分から夫の出稼ぎ先へ行くケースもある。

第3に，女性たちのネットワークが広がってきている。学校教育の普及にともない，20代の女性では，村内のリネージ以外の人よりも，村外の友人との付き合いが増えている。様々な形で都会へ出かける若い女性が増えるにつれ，そこから農村へ様々な情報が伝わるという現象も起き，テレビやラジオ，雑誌などのメディアを通じて，都会の暮らしの様相は農村にも伝わる。これらの情報は，村外の友人をこえて伝わり，若い女性たちの間にブラジャーをつけたり，白いクリームを肌に塗るといったおしゃれや，ノー・プラント（皮下埋め込み式避妊薬）という新しい避妊法[19]などが即座に女たちのネットワークを通じて伝えられている。

このように，従来，家庭内の女性に期待された行動や役割とは異なる動きが若い女性を中心にみられるようになり，夫や男性親族の庇護のもとに行動するのでなく，女たちだけで，あるいは1人で行動する女性の姿が変わりゆく社会を伝えている。生活レベルの向上，モータリゼーションの発達，現金経済の流入，マス・メディアの影響などにより，農村社会にも変化がおとずれている。これまで，女性には好ましくないと思われた行動の基準が，社会の変化のなかで変わりつつある。本章では，現時点でみられる変化を覚え書という形で総論的にみてきたが，この動きがどのように推移していくのか，今後は各論を展開していく予定である。

〔注〕

(1) Oscar Lewis, *Village Life in Northern India : Studies in a Delhi Village*, Urbana : University of Illinoi Press, 1958／Milton Singer, *When a Great Tradition Modernizes: An Anthropological Approach to Indian Civilization*, New York: Praeger Publishers, 1972.

(2) Gilbert Etienne, *India's Changing Rural Scene : 1963-1979*, Delhi : Oxford University Press, 1982／T. Scarlett Epstein, "Mysore Villages Revised," in George M. Foster et al. eds., *Long-Term Field Research in Social Anthropology*, New York : Academic Press, 1979, pp. 209-226／Helen Ullrich,"A Study of Change and Depression among Havik Brahman Women in South Indian Village," *Culture, Medecine*

and Psychiatry, No. 11, 1987, pp. 261-287.

(3) Leigh Minturn, *Sita's Daughters : Coming out of Purdah*, Oxford : Oxford University Press, 1993.

(4) William H. Wiser and Charlotte V. Wiser, *Behind Mud Walls 1930-1960*, Berkeley : University of California Press, 1971／Charlotte V. Wiser, *Four Families of Karimpur*, Foreign and Comparative Studies Program, South Asian Series No. 3, Syracuse: Syracuse University, 1978.

(5) S. Susan Wadley, *Struggling with Destiny in Karimpur: 1952-1984*, Berkeley: University of California Press, 1994.

(6) 八木祐子「婚姻儀礼と女性の歌—北インドの村から—」(八木祐子編『女性と音楽』民族音楽叢書第2巻，東京書籍，1990年) 57～76ページ／同「シーターの夢—婚姻儀礼の歌にみられる家族関係—」(八木祐子編『女性と音楽』所収) 175～199ページ／同「儀礼・職能カースト・女性—北インド農村における通過儀礼と吉・凶の観念—」(『民族学研究』第56巻第2号，1991年9月) 181～208ページ／同「儀礼・歌・パフォーマンス—北インド農村の婚姻儀礼をめぐる—試論—」(『南アジア研究』第4号，1992年10月) 59～78ページ。

(7) 多田によれば，その理由としてあげられているのは，低生産性，工業発展水準の低さ，社会的サーヴィスの水準の低さ，インフラストラクチャーの不十分さ，洪水や旱魃の頻発があげられている。多田博一「北インド，ウッタル・プラデーシュ州におけるカースト制度と農業生産」(押川文子編『インドの社会経済発展とカースト』アジア経済研究所，1990年) 103，121ページ。

(8) Etienne, *India's Changing Rural Scene*….

(9) R. C. Sharma, *Part IV*, *Village Survey Monograph No. 22*, *Village Parki Buzurg*, *Vol. XV*, *Uttar Pradesh*, *Census 1961*, Allahabad: Indian Administrative Service, 1965.

(10) ヤーダブ (Yadav) という表記もある。またアヒール (Ahir) と書かれる場合もあるが，彼らの自称ではヤーダウと呼んでいるのでそれを採用する。

(11) ウッタル・プラデーシュ州の経済的区分の西部地域のなかには，独立以前にはザミンダールの小作人であったヤーダウが，土地改革後の1960年以降，耕地面積の4分の3を占めるようになった地域もある (多田「北インド，ウッタル・プラデーシュ州…」121ページ)。社会経済の発展にともなう中間カーストの動向の変化については，押川編『インドの社会経済発展…』が詳しい。

(12) Sharma, *Part VI*, *Village Survey Monograph No. 22*…, p. 8.

(13) 都会では，新聞の求婚広告がかなり利用されている。1970年代には，上層カーストが主な広告主であったが，現在は様々な意味で様変わりしており，ヤーダウ・カーストも求婚広告によって結婚相手をさがす時代になってきている。

(14) ドーリーはあまり使われなくなったが，歌にその名残りがみられる。今でも式

場近くだけドーリーで運ぶ場合もある。

(15)　1ルピー（Rs）は，1994年時点で，約3.5円。

(16)　八木「儀礼・職能カースト・女性…」／同「儀礼・歌・パフォーマンス…」を参照のこと。

(17)　これと関連して注目したいのが，菜食から非菜食への動きである。1984年に最初に調査地域を訪ずれたときには，菜食の人がほとんどであり，非菜食であっても川魚がカレーの食材として用いられていた。ヤーダウのなかで唯一ニワトリの肉を食べる一家が，ムルギー（雌鶏）という蔑んだあだ名で呼ばれていた。ところが年ごとに，ヤギやニワトリなど肉を食べる回数が増え，4～5年前には，ニワトリが村中を走り回っていた時期もある。現在ではニワトリを飼っている家は2軒だけで，家で飼っているヤギをホーリー祭などにつぶして食べている。それにともなって，市場から買ってきたウイスキーやラム酒を飲んで男性たちが酔っぱらう機会も増えている。肉料理は家の外で調理され，食器も別のものを使用し，調理の担い手は男性である。女性は肉を食べると非難されるため，年配の女性は菜食の人が多いが，若い女性のなかには，魚やヤギの肉を食べるものもでてきている。

(18)　女性が行う儀礼だけでなく，祭や村の行事自体がリネージごとに行われるようになっている。例えば，ホーリー祭では，ホーリーの祝火を燃やしたり，色水をかけあったりすることが，1985年以前には村全体1カ所で行われていた。だが，94年現在では，祝火は3カ所に分散し，色水のかけあいもリネージの範囲内で行われるようになっている。Dīh Bābā と呼ばれる村の守り神の祠も，3年前に強風で倒れてきた大木が倒れかかったまま，いっこうに修理される気配もない。村自体の連帯感は薄れる傾向にある。

(19)　上腕の筋肉にマッチ棒大のホルモン剤入りカプセル6本を埋め込むというもので，避妊効果が5年間つづく。アメリカ人口審議会が途上国向けに開発したもので，1980年代後半にインドでは約3500人の女性に対して実験的にこの方法が試みられたが，副作用が強く，現在では用いられていない。